

講座Ⅱ文学・芸術の基礎理論 2

# 日本の文学

伊豆利彦・山田清三郎・佐藤静夫

汐文社

# 日本の文学

## 第2巻

伊豆 利彦  
山田清三郎 著  
佐藤 静夫

汐 文 社

執筆者

伊豆利彦

横浜市立大学教授

山田清三郎

作家

佐藤静夫

東京教育大学教授

講座「文学・芸術の基礎理論」

第二巻 日本の文学

---

1974年8月1日 第一版

	伊豆利彦
著者	山田清三郎
	佐藤静夫
発行者	今田保
印刷者	田中勝正

発行所 汐文社

京都市下京区七条河原町西南角  
東京都千代田区外神田2の1の4

---

刊  
行  
の  
こ  
と  
ば

## II

文学とは何か、ということについては、古今さまざまに語られてきた。それはほとんど語りつくされた、ともいえるほどである。しかし、それにもかかわらず、こんにちにおいても、文学とは何か、と問うこと、また文学について語ることは、われわれにとつて、すこしの意味も喪われていない。何故であろうか。それは、文学とは何か、と問うこと、また文学について語るとは、人間とは何か、と問うこと、また人間について語ることと同じように、常に古くかつ新しい問題であるからである。

とくに、時代の変革が大きく迫られている今、この歴史的時代の現実、今のこの文学にさまざまに映されているばかりでなく、そこにはまた、変革の時代にふさわしく、あらためて文学にかかわる根源的な問いと、文学の歩んだ国内外の歴史への検証が深く求められている。

本講座は、こうした時代の現実と文学のなかに生き、そこに時代とみずからの姿を客観視しようと求める若き勤労青年、学生に向けて企てられた。

直接には、これは、そうした若き人びとの学ぶ場としての学園、中央労働学院に、講師として参加しつつあるものの、その担当講義を中心として執筆され、そこに集う若き人びとを念頭にして編まれたものである。

しかし同時に、われわれは本講座を、単に右のこととしてだけに止めず、およそ社会と人間

の合理に適った進歩を求め、文学・芸術と生活の豊饒をこよなく愛する人びと、そのより広い人びとに向かつて、またものごとの真理を求め、文化・文学・芸術諸ジャンルのなう原理的諸問題について、より深く科学的な理解を得ようと志す人びと、国内外の文学の歴史について、一層の立ち入った把握を志す人びと、そのより広い人びとに向かつて、差し出すことを考えてこれを編みこれらの筆をとった。

もとより、紙数の制限その他により、われわれの意図が十全にここに果されているとは考えていないが、文化・文学・芸術諸ジャンルについて、その理論と歴史のあゆみを、今のこの時代をふまえて可能なかぎり明らかにしようとして試みられた本講座について、忌憚ない意見、批判が寄せられるならば、われわれにとってこの上なき倖である。

講座「文学・芸術基礎理論」編集委員会

## 目次

第一部 近代文学……………	伊豆 利彦	三
■第一章 出発点の問題……………		三
一、リアリズムのふたつの道……………		三
二、ローマン主義のふたつの道……………		一五
三、ロマンティシズムの開花……………		三〇
第二章 リアリズム文学の確立……………		四四
一、樋口一葉のリアリズム……………		四四
二、島崎藤村の『破戒』への道……………		六五
三、『破戒』のリアリズム……………		八三
第三章 リアリズム文学の展開……………		九六
一、日露戦争と文学……………		九六
二、自然主義文学の展開……………		一一一
三、石川啄木——「明日」の精神……………		一三五

四、漱石文学の展開……………一四

第二部 回想のプロレタリア文学……………山田清三郎

第一章 労働文学の成立……………一七五

第二章 『種蒔く人』の頃……………一八五

第三章 『文芸戦線』の頃……………一九一

第四章 ナップの時代……………一九九

第五章 コップの時代……………二〇五

第三部 戦後文学……………佐藤 静夫

はじめに……………三二一

第一章 戦後文学の出發と戦争体験……………三二三

第二章 宮本百合子『播州平野』……………三二五

第三章 戦後民主主義文学の出發点の問題……………三三〇

第四章 「戦後派作家」とその「自己確認」……………三四四

第五章 民族の自立の問題……………三五六

第六章 労働者のたたかを描く文学・その他……………三九五



第一部 近代文学



## 第一章 出発点の問題

### 一、リアリズムのふたつの道

#### 1 自由民権運動の挫折と日本の近代文学

幕末から明治維新を経て自由民権運動の発展にいたる一時期は、封建体制の打破と近代国家の確立を目ざして、旧勢力と新勢力がはげしく対立し、衝突する激動の時代であった。それはまた明治政府による上からの近代化<sup>11</sup>改良政策と、自由民権運動に結集された下からの革命的なエネルギーがぶつかりあうたかひの時代であった。国民の関心は政治に集中し、近代国家を形成するために必要なヨーロッパの学問、新思想・新知識を貪欲に求めた。新しい時代は新しい人材を大量に必要とした。封建的な身分制度の重い鎖がとき放たれ、これからは新しい学問を身につけさえすれば、どんな身分の出身であろうと、どこまでも立身出世の道が開けそう

に見えた時代である。しかも個人が自分の能力を發揮し、功名榮達の道を歩くことが、同時に近代日本の確立という国民的な事業を実現することになると考えられたのである。封建的な暗い生活からの解放を求め、自由と独立を求める青年たちは、ひたすら新しい學問に若々しい血をもやし、一身を投じて自由民権の實際運動に参加していった。新時代の理想が青年をとらえ、その実現をめざす運動が昂揚した時代である。理想と現実の矛盾というようなことは意識されず、理想と現実をひとつに結びつけようとする青年の夢が大きくふくらんだ時代である。

この時代には、新時代の風俗をおもしろおかしく描き、あるいは新時代を冷笑する戯作文学はあったが、文学を男子一生の事業と認め、すべてを賭して文学にとりくむ青年はいなかった。この時代さかんに出版された翻訳小説や政治小説も、学者や自由民権運動家の余技で、西洋の世態風俗人情の新しい知識を伝えるものであったり、また政治運動の補助手段として、自由民権の政治思想を宣伝するためのものであったりした。文学が啓蒙的功利的な意味をはなれ、人間の魂の重大な問題として自覚されるようになるのは、明治二十年代にはいつてからのことであるが、明治十八年ごろから文学に対する新しい態度が次第にあらわれはじめている。「翌明治十八年に入りて、生は全く失望落胆し、遂に腦病の爲に大に困難するに至れり。然れども少しく元気を回復するに至りて、生は従来の妄想の非なるを悟り、ここに小説家たらんとの望みを起したり。されど未だ芸術家たらんとは企てざりし。希くはおがは仏のヒュウゴ（ユーゴ

一のこと）その人の如く、政治上の運動を織々たる筆の力もて支配せんと望みけり。」これは、明治元年に生まれ、少年時代から熱烈な情熱をもって自由民権運動に参加した北村透谷（一八六八—一八九四）が、明治二十年に恋人石坂美那子（のちの夫人）に宛てた手紙の一節である。ここには情熱的な政治青年が現実につき、文学に心を寄せるにいたったひとつの転機が語られている。この明治十八（一八七五）年は、坪内逍遙（一八五六—一九三五）の『小説神髓』・『三説当世書生氣質』が刊行された年であり、また当時東京大学の学生だった尾崎紅葉（一八六七—一九〇三）・山田美妙（一八六八—一九一〇）らが硯友社（けんゆう）を結成した年でもある。東京外語学校（今の東京外語大の前身）でロシア語を学び、外交官として国事に奔走しようと考えていた二葉亭四迷（一八六四—一九〇九）が、外語を中退して、作家になる決心をもって坪内逍遙の門をたたいたのが、明治十九年一月のことであった。内田魯庵（一八六八—一九二九）も、このころ建築家の志望を捨て、文学を志すようになっていた。

明治十六（一八八三）年から十七年にかけて、福島事件・高田事件・加波山事件（かばさん）・秩父事件（ちちぶ）・飯田事件・名古屋事件・静岡事件と、全国各地で激しいたたかいが相ついで起ったが、自由党の中央指導者たちは妥協的な態度をとり続け、明治十七年には党を解散した。このためこれら各地のたたかいは孤立分散してたたかわれ、政府によって各個撃破された。明治政府は自由民権運動の革命的なエネルギーの圧殺の上に、明治二十二（一八八九）年に憲法を發布し、絶対主

義的天皇制国家の基礎を確立したのである。透谷の失望落胆はこのような時代が生んだのであり、透谷における文学は、この「失望落胆」をのりこえて、新しいたたかひの可能性をさぐり求める所に生まれたのであった。

新しい時代の声に、そのやわらかな心をかきたてられ、自由と解放を求めて渾沌たる変革の時代を生きた青年たちは、きびしい時代の現実に直面して、無残な挫折の体験をあげわった。理想と現実の矛盾にひきさかれた青年たちは、あらためて現実を認識しなおし、自分自身を見しなおさなければならなかった。ここに日本の近代文学の新しい出発点があった。明治十八年刊行の『小説神髓』が、従来の主観的、観念的、勸善懲惡の文学を否定して写実主義を主張し、新時代の文学に強い影響をあたえたのは決して偶然ではない。しかし空想的主観的な態度を否定するリアリズムにも、対立するふたつの道があった。理想の追求を一切放棄し、ひたすら現実屈伏し、現実を肯定し美化する現実主義と、現実の矛盾をどこまでも追及し、これを批判、克服するために、きびしく現実を見きわめようとする批判的リアリズムの道である。

## 2 リアリズムのふたつの道

坪内逍遙の『小説神髓』と二葉亭四迷の「小説総論」

## 7 出発点の問題

坪内逍遙の『小説神髓』は文学を勸善懲惡の封建的モラルから解放した。固定した道徳や思想にとらわれて、現実の眞の姿を見うしなう觀念的な創作方法を否定して、現実にのみ忠実なリアリズムの道をきりひらこうとしたのである。自由民権の思想を鼓吹する政治小説も、もちろん封建道徳には反対したが、文学を直接に政治目的に従属させることによって、善玉悪玉の勸善懲惡におちいり、どこまでも現実の真相に迫るといふことが妨げられがちであった。

理想や道徳に都合のよいように現実をまげて描くことに反対する逍遙は、ひたすら現実を「模擬」する写実を強調した。「小説の主眼」は「人情」「世態風俗」の認識であり、「見えがたきを見えしめ、曖昧なるものを明瞭にし、限なき人間の情慾を限りある小冊子のうちに網羅」して、「人生の大機關をばいと詳細に」わからせて、読者を自然に反省させるのが小説であるといふのである。人間を「情慾の動物」であると規定する逍遙は、賢人君子、老若男女、善惡正邪の心の中の内幕をもらす所なく描き出し、「人情を灼然として見えしむる」のが「小説家の務め」だと述べた。

『小説神髓』の日本近代文学史における画期的な役割を否定することはできないが、逍遙は理想を追求する一切の精神を空想主義として、勸善懲惡思想とともに否定し去り、無思想無理想をその主義としている。これは現実の矛盾や不合理を、すべてそれが現実であるという理由で肯定し、現実に対する批判やたかいたかを放棄するものである。人間を「情慾の動物」と規定

し、社会を世態風俗としてとらえる写実主義は、封建的モラルからの文学の解放にはなっても、表面的な、一般的常識的な人間把握にとどまり、新しい生き方を求めて苦悩する新時代の青年を、その内部にたちいて描くことはできない。逍遙の小説論のこの欠陥は、その実作である『当世書生気質』にはっきりと暴露されている。

『当世書生気質』で逍遙は、明治になって急激に増加した書生たちの生活の種々相を描き出し、そのさまざまなタイプを描き分けようとした。粗暴を誇り、大言壮語して遊蕩にふけるもの、着実に勤勉に学ぶ前途有為の青年、あるいは芸者になった昔なじみにめぐりあい、恋愛に悩むもの、等々。しかし逍遙の写実主義はこの書生群像を外側から観察して、「世態風俗」として描くにすぎず、これらの青年の内部にたちいり、かれらの直面する苦悩や矛盾を追及して、社会の根底によこたわる根本的な矛盾に迫るということはなかった。書生風俗のひとつまひとつまは、おもしろおかしく、リアルに描かれているが、小説世界を統一し、ストーリーを展開する基本的な主題がないのである。そこで逍遙はひとつの小説にまとめあげるために、幕末動乱によってちりちりになった親子兄妹が、迂余曲折の末にめぐりあうという、旧態依然たる物語の筋をもちこんでこなければならなかった。

二葉亭四迷はこの逍遙の写実主義の欠陥を鋭く指摘して、新しいリアリズムの道をきりひらこうとした。二葉亭の「小説総論」は『書生気質』を批判するための理論的根拠をあきらかに



するために書かれたのであるが、ここにも徹底して理づめに考える二葉亭の性格があらわれている。「小説総論」はロシアのベリンスキーの文学論にみちびかれた十枚内外のごく短いものであるが、日本の近代文学史上特筆すべき問題提起をおこなっている。

「凡そ形（フォーム）あれば意（アイデア）あり。意は形に依って見はれ、形は意に依って存す」という一句でこの「小説総論」ははじまっている。現象は本質のあらわれであり、本質は偶然的な現象を通してのみあらわれる。小説が偶然におおわれた現象として現実の諸相を描くのは、その現象としての面白さを伝えるためではなく、あくまでもそれを通して現実の本質に迫ろうとするのである。科学が抽象によって事物の本質を明かにしようとするのに対して、芸術は現実をまざまざと感じとることによって、その本質に迫ろうとする。このような観点から、二葉亭は模写の必要を説き、創作方法としてのリアリズムを論じて、脚色の問題、文章の問題にまで論及した。二葉亭は言文一致の創始者として文学史上に大きな役割をはたしているが、それは単なる新時代の新意匠ではなく、この小説論から必然的に導き出されたものである。現代に生きる人間の生活と思想をリアルに描くためには現代の言葉で書く必要がある。それ故従来型の型にはまった文語文をやめ、言文一致の新しい文体をつくり出すために、今日からは想像もできぬ苦勞をしたのである。明治二〇（一八八七）年から、同二二年にかけて発表された『浮雲』は、この小説論にもとづき、日本に本格的なリアリズム文学の道をきりひ